

第 12 回(2013.02.19 配信)

篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

平氏と平家

「源氏」とか「平家」という言葉は誰でも知っています。しかし、「源家」という言葉を聞いた方はいないでしょう。たとえば、源氏とは源(みなもと)の姓をもった氏族の総称ですから、(第 10 回氏と姓を参照)「平」の姓をもった氏族は「平氏」というのが普通です。なぜ「平家」なのでしょう。

そもそも、源氏とか平家という言葉は、頼朝が旗揚げしてから平家が滅びるまでの戦いを描いている『平家物語』や『源平盛衰記』などに登場してから、一般に広く知られるようになったのですが、源義経や頼朝が戦ったのはあくまでも平清盛一家が主力であって、平姓の氏族とはありません。ですから平氏ではなく平家なのです。源氏の方は源頼朝一家だけではなく源(木曾)義仲や源行家などの源姓の氏族が参戦しましたし、頼朝の妻北条政子に家は平氏であるのと同様に平氏も頼朝軍に参加していますで、そこが平家軍と違うわけです。

弘仁 5 年(814 年)に嵯峨(さが)天皇(第 52 代・在位 809～823)が 8 人の子に源(みなもと)の姓を与えたのが源氏の始まりで、以降にも、醍醐(だいご)、清和(せいわ)、村上(むらかみ)など多くの天皇の子供が源姓を与えられて臣籍に下っています。源姓は天皇と源を同じくするという意味だという説もあります。

「平氏」は、桓武(かんむ)天皇(第 50 代天皇)、仁明(にんみょう)天皇(第 54 代天皇)、文徳(もんたく)天皇(第 55 代天皇)、光孝天皇(第 58 代天皇)の 4 人の天皇の子孫が、平姓を与えられて臣籍に下りました。平氏で有名な者は、桓武天皇を祖とする「桓武平氏」の子孫でしょう。なかでも有名な人は平将門(たいらのまさかど:903～940)と平清盛(1118～1181)でしょう。

承平(じょうへい)5 年(935)、関東に土着した桓武平氏一族の間に領土争いが起きました。このとき、平将門は、都に行っていた間に領土を奪った伯父の平国香(たいらのくにか)を殺害しましたが、これを契機に地方豪族による朝廷への反発は全面的な国家への反乱へと繋がります。これが歴史教科書に出てくる「将門の乱」です。平将門は結果的に反乱を企てた朝敵とされてしまいましたが、そもそもの発端は一族の内紛であり、そこに租税を徴収する源経基(みなもとのつねもと)のような官吏の横暴などに不満を持つ地方豪族に頼られた将門の不幸があったことは事実で、後に徳川三代将軍家光の時代に朝敵の汚名が晴れました。余談ですが、この将門を祀ったのが東京のお祭りである有名な神田明神です。

また、平清盛は平忠盛(たいらのただもり)の嫡男として生まれたとされていますが、一説には白河上皇の子を身籠もった祇園女御が忠盛に下賜されて、生まれた上皇の子供が清盛だとも言われています。保元(ほうげん)元年(1156)の「保元の乱」で華々しい活躍をし、平治(へいじ)元年(1159)の「平治の乱」では源義朝(みなもおのよしとも)を討って、武人として初めて従一位太政大臣を授かりました。NHK の大河ドラマで活躍しましたから御存じでしょう。

平氏に関する話は、平清盛一門の他にはあまり出てきません。その理由は、そもそも源氏は臣下に下ってからすぐに姓を賜ったので、多くの人たちが代々源姓を名乗っていたのに対し、平氏は臣下に下って与えられた土地に住んで、多くはその土地などの姓を名乗っていました。それが孫の代あたりになって、平氏の姓を賜るものだから、後々まで平氏を名乗った人が少なかったことにもよります。

最近、各地に「平家の子孫」と名乗るものが出てきて、今では「平家落人の里」などと名乗って観光名所として売り出していますが、これは平家ではなく平家の郎党(家臣)の末裔です。なぜなら、源平の合戦で平家一門は壇ノ浦で全滅して平家蟹になってしまいました。「平家」とは平清盛一族を指しますから、家来どもが勝手に主君の子孫だと言っているようなものですが、一門の武将の姫を連れてこの地に逃れてきたという伝説を盾に主張するところもあるようです。

平家が栄華を誇っていたころ、「平家一門にあらざらん者は人にあらず……」と豪語したのは、清盛の妻時子の弟の平時忠(たいらのときただ:1128~1189)です。清盛と同じ桓武天皇の子孫ですが、武家ではなく公家でしたから、壇ノ浦の合戦で源義経に捕虜にされても一命は助かり、能登に流されて、その子孫は時国家として代々格式の高い家柄を誇ったと言います。

平家一門の武将は残らず討ち死か自害したのですが、じつは生き残った者がいました。それが平頼盛(たいらのよりもり)で清盛の腹違いの弟です。母親が池禅尼(いけのぜんに)と呼ばれていましたから、通称池大納言(いけのだいなごん)と呼ばれました。この頼盛は、もともと清盛とは不仲だったので、平家が都落ちをしたときも同行しませんでした。本来なら一族は捕まえられれば処刑される場所ですが、母親が池禅尼だったことで助かったのです。「平治の乱」で敗れた源義朝の子の頼朝は、池禅尼が清盛に嘆願して処刑を免れたので、頼朝にはその恩義があって頼盛を助命したのだと言われています。池禅尼は、幼くして亡くなったわが子に頼朝が似ていたから助命嘆願しました。その結果平家一門は滅亡したのです。こういった場合は、「情けは人のためならず」といっていいのかどうか、微妙ですね。

『源氏物語』と『平家物語』

生半可に日本の文学を嚙った外国人の中には、『源氏物語』と『平家物語』とが同一の時代の作品で、お互いに関連しあっていると思っている人がいます。当然、これは間違いで時代も背景も違います。しかし、日本人の中にも同じように思っている人がいますから、あまり文句もいえないですね。

『源氏物語』とは、平安中期の作品で、主人公の光源氏という貴族が、多くの女性と関係する長編恋愛小説で、紫式部が書いたと言われています。他方、『平家物語』とは、鎌倉時代に成立した、平家一門の栄耀栄華から源平の戦いに破れて没落していくまでの軍記物語です。

『平家物語』の原本は、いつ頃、誰が書いたかは定かではありませんが、現在私たちに語り継がれている話の多くは、応安(おうあん)5年(1371)明石検校覚一(あかしけんぎょうかくいち)という人が琵琶本として書いた『覚一本』から引用されていると言われています。平安時代から江戸時代にかけて、「琵琶法師」と呼ばれる僧体をした盲目のアーティストが、琵琶や三弦で弾き語りをしていました。その楽譜が琵琶本です。

ちなみに、紫式部、清少納言、和泉式部など有名な宮廷文学の主な作者は女性でした。紫式部は、一条天皇(第66代天皇、在位986~1011)の中宮の彰子(しょうし)に仕え、『枕草子』の清少納言は皇后の定子(ていし)に仕えていましたが、当時は藤原一族を主とする貴族が娘を天皇の后にさしだして、権力を保持する時代でしたから、娘の箔をつけるために争って才媛を雇ったと言います。

この「中宮」とは天皇の妻たちのことを言います。本来は皇后がいなかった時代に呼ばれた名称だったのですが、皇后と中宮は並立していた時代がありました。実家の権威や天皇と退位して上皇となった天皇などとの思惑など、さまざまな要因からこの名称がつけられたと言いますが、一般人だったら簡単に区別差別が出来るのに、高貴な世界は複雑怪奇で面倒なものです。

ところで、古い時代から卑弥呼にはじまって数多くの女性が歴史に登場しますが、ほとんど実名が出てきません。『源氏物語』を書いた紫式部は、藤原式部丞為時(ふじわらのしきぶのじょうためとき)の娘ですから、作品に登場する「紫の上」にちなんで紫式部と呼ばれました。同じように、清少納言は清原元輔(きよはらのもとすけ)の娘で、結婚した相手の藤原信義(ふじわらののぶよし)が小納言だったから清少納言であり、また和泉式部も結婚した相手の橘道貞(たちばなのみちさだ)が和泉守(いずみのかみ)で、父親の大江雅致(おおえのまさむね)が式部丞(しきぶのじょう)だから和泉式部なのです。このように、大概是「誰々の娘」とか「誰々の母」とされていて、諱(いみな:実名)は、系図に残るような高貴な家の女性でなければ残されていません。

また、小野小町など歴史に登場する才能豊かな女性は例外なく美人です。不細工な顔をしていたという話は不思議と出てきません。才女ばかりではなく、木曾義仲の巴御前(ともえごぜん)や鎌倉幕府討伐に動いた越後の城氏の娘である板額(はんがく)御前など武勇に優れた女性たちも、当然のように美人であったとされています。それもこれも、情けないことに、世の男どもは女性とみればみんな美人だったという願望があるからに違いありません。自分になびくようになるわけでもないのにね。

(篠井純四郎)